

新規就農のススメ

花のまち 当別町で就農を目指す 研修生を紹介します

地域おこし協力隊として、新規就農の研修へ

先月の集中連載第1回では、当別町の新規就農を支援する当別町農業総合支援センターの取組を紹介しました。第2回の今回は、新規就農を目指して中小屋地区で研修を行っている高橋健太さんを紹介します。

飲食業から農業へ転身

高橋さんは高校卒業後、札幌などの飲食店で長く働いていましたが、別な業種への転職を探していたところ、JA北いしかりの無料職業紹介所を通じて、令和2年の6月から11月までの間、現在の指導農家の岩中さん宅で農業アルバイトとして働くことになりました。実家のニセコ町で祖父母が農業を営んでいたものの、自身が仕事として農業を行うのは初めてのことでしたが、この経験から就農を決意。翌年からの新規就農に向けて、準備を始めました。

地域おこし協力隊制度を活用

高橋さんは、当時募集していた農業支援員の地域おこし協力隊の制度を活用して、令和3年6月から新規就農の研修を開始しました。

農繁期である夏期は、農業生産に必要な基礎技術の取得を目指し、岩中さん宅で花き栽培を中心に、米や小麦、トウモロコシなどの農作業全般の研修を受けています。農閑期の冬季には、農業経営に関する研修を行うなど、3年間をかけて農業に必要な知識と技術を身につけます。

このほか、地域協力活動として当別町の農業の魅力を伝える活動も行う予定です。

高橋さんは、将来的に農業法人に雇用されて働く「雇用就農」を目指しており、目標に向けて日々、経験を積んでいます。

地域おこし協力隊とは？

地域おこし協力隊とは、都市部の人材が、過疎地などの地方に移住して、特産品を生かした商品開発やPRなどの地域おこし支援をはじめ、農林水産業への従事や住民支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住を図る取り組みです。

当別町では、基幹産業である農業の更なる発展を図るため、農業で自立を目指す方を協力隊員として採用し、新たな農業の担い手として就農されることを期待しています。

就農するための3つのパターン

新たに経営を始める

独立就農

多くの方がイメージする新規就農の形です。自身で栽培作物の計画を決めることができるなど農業の魅力が高い反面、農地の確保や初期投資の資金面などで苦勞することもあります。

雇用されて農業で働く

雇用就農

農業法人の従業員として働くスタイルです。一般のサラリーマンと同様に給料をもらって働きながら、農業に従事することができます。

親や親戚などの農業を継ぐ

事業継承

農業を家業として代々就農している方々はこのケースに当てはまります。最近では親から子だけでなく、祖父母から孫や、跡取りのいない親戚からの継承もあります。

研修生の高橋さんと指導農家の岩中さんにお話を聞きました



研修生（地域おこし協力隊員）

高橋 健太さん

ニセコ町出身の31歳。妻との2人家族。趣味は釣りやキャンプなどアウトドア全般。



皆さんこんにちは。岩中さんに指導をいただきながら地域おこし協力隊として新規就農に向けて活動しています高橋です。

飲食業からの転職で農業を始めましたが、朝早く起きる規則正しい生活を送ることができ、体力もついて、健康的に過ごしています。

岩中さんと地域の草刈りに参加させてもらい、近所の農家の方々にも声をかけていただき、地域に馴染めるようがんばります。

農業は種まきから出荷まで、作り上げる作業の全てを自分の手で行うことができる仕事です。全体の一部しか携わることができない仕事が多い中で、全てに携わることができる農業は、とてもやりがいのある仕事だと感じています。

今は始めたばかりで岩中さんに指示をもらって作業をしていますが、指示をもらわず自分自身で考えて作業できるよう生産技術をマスターするのが目標です。



指導農家

岩中 和則さん

当別町出身の46歳。中小屋地区で水稻、花き、カボチャなど作付。

高橋君はとても真面目に農作業に取り組んでくれています。地域との関わりも陰ながらサポートしつつ、将来的には農作業全体を見れるまで成長して欲しいです。

高橋君が来てくれたおかげで、法人化や規模拡大など可能性が広がります。まずは高橋君の雇用就農を見越して、来年からビニールハウスや田んぼを増やす予定です。

■問合せ

当別町農業総合支援センター（☎23-2552）